

第8章 白熱!! 決勝戦

ついに日本一をきそう全国中学大会のひぶたがきられた。そして谷口にとってこれがキャプテンとしての最後の試合でもあった。

8・1 緊張感

球場の更衣室で墨谷ナインがきがえをしているが：

イガラシ「だいじょうぶですかね、あんなにあがってて…」

谷口「こんな大試合はじめてだからな…」

イガラシがユニフォームにそでを通しながら谷口に話しかけた。谷口もそうだったが、ナインも足が地面についていないようだった。そしてイガラシも：

谷口「それ、おれのユニフォームだぞ…」

イガラシ「い、いけね…」

谷口「おちつけよイガラシ。」

イガラシ「は、はい。」

きがえが終わり、係員につれられ更衣室からグラウンドに向かう廊下を歩きだす。ナインの耳にはみようにスパイクの音が響いてきた。

谷口がナインに向かって声をかける。

谷口「おちついていこうぜ！」

だが、ナインはなぜかうわのそらで谷口の言葉を聞いていた。

8・2 大観衆

グラウンドに足をふみいれると、そこには墨谷、青葉両大応援団がきそうように応援合戦をくりひろげていた。さきに練習していた青葉ナインは大舞台を経験しているだけに余裕をもって墨谷ナインをみつめていた。

中村「なんでえ、まるで足が地についてねえじゃねえか。」

遠藤「あれでまともにたたかえるのかねえ。」

グラウンドにはいつてきた墨谷ナインがとまどっている。青葉部長が声をかけた。

青葉部長「さ、どうぞ、どうぞ…、いまかたづけさせますから。」

谷口「ど、どうも、さあみんな、キャッチボールをやろう！」

全国大会決勝戦ということでその異様な雰囲気は墨谷ナインはのまれてしまっていた。

「がんばれ、がんばれ、すーみーやーっ！」

「がんばれ、がんばれ、すーみーやー！」

青葉生徒「こっちもまけずにやろうぜ！」

「フレッツ、フレッツ、あーおーばーっ！」

「フレッツ、フレッツ、青葉！」

「フレッツ、フレッツ、青葉！」

試合前の両軍の練習が終わり両軍選手がホームベースをはさんであいさつをした。とうとう全国大会の決勝戦が開始される。青葉学院は四連覇をめざして、もちろん墨谷二中は初優勝をめざして…

青葉トップバッター、セカンド中村がバッターボックスにはいった。

審判「プレイボール！」

ピッチャーイガラシの一球目は膝元にくるストレート、バッターはみのがしてストライク。谷口からイガラシに声がかかる。

谷口「いいぞ、その調子だ！」

二球目のタマをバッターは打つがひっかけてショートゴロになる。

中村「し、しまった！」

ナインから「ショート」という声がかかり、ショート高木がボールをとった。しかし一塁へ送球しようとしたボールが手からこぼれおちてしまった…エラーである。青葉中村はなんなく一塁セーフとなる。

高木「い、いけね…」

谷口「おちついていこうぜ！」

イガラシ「ドンマイ！ ドンマイ！」

高木のところにナインから声がかかる。

青葉二番打者はセンターを守る藤田である。藤田の打球もショートゴロとなる。

ピッチャーイガラシから声がかかる。

イガラシ「ショート！」

高木「あ…」

が…こんどは後方にそらしてしまった。ダブルプレイをねらってセカンドにはいつていた丸井が高木のそらしたボールをバックアップする。

高木「す、すみません。」

谷口「肩の力をぬけ。」

しかし大観衆のまえであがっていたのは高木だけではなかった。

青葉三番打者のあたりは簡単なセンターフライ、センター浅間が前進してとうとうするがこれを落球してしまう。

谷口「タイム！」

谷口はナインをマウンドに呼びよせる。

谷口「どうしたんだよみんな、どれも目をつぶたってとれるタマじゃないか！
いかおちついていこうぜ！ いつものとおりやればいいんだ！」
部員「は、はいっ。」

ノーアウト満塁で青葉の四番打者をむかえた。

イガラシがファーストランナーのリードが大きいとみて、牽制球を投げた、しかしこのタマをファースト加藤がうしろにそらしてしまう。ライト島田がカバーした。島田からの返球をファースト加藤がうける。イガラシが加藤に声をかける。

イガラシ「サード！」

しかし加藤はまったくまにあわないキャッチャーのところにボールを投げてしまい労せずして二点を失ってしまう。また一塁ランナーも三塁に進塁する。

イガラシ「サードっていったのがきこえねえのかよ！」

谷口「タイム！」

谷口がイガラシのもとに走っていく。

谷口「短気をおこすな！」

墨谷ナインがマウンドにあつまる。

谷口「みんな深呼吸をしろ！」

マウンドに集まったナインは谷口の指示通りに深呼吸するが、イガラシだけマウンドの土をけっている。

谷口「イガラシ、ここでおまえがくさったらどうなるんだ！」

イガラシ「す、すみません…」

ナインは気をとりなおして守備につく。ノーアウト三塁まだ墨谷二中のピンチはつづく。四番バッターの打球はサードゴロだった。谷口はこのゴロをとり、ランナーを牽制して一塁へ送球する。

審判「アウト！」

送球を受けた加藤は前のエラーがあつたのでホッと胸をなでおろした。

谷口「この調子でいこうぜ！」

はじめてのアウトでややホッとした墨谷ナインだったがワンアウト三塁ピンチにはかわりがない。

つぎの打者にたいしてピッチャーイガラシは投げたが…

「カーン！」

バットから快音が聞かれ、打球はレフトスタンド上段にすいこまれていった。

イガラシはなぜ打たれたのかわからなかった、バッターの苦手なコースになげたはずなのに…打たれたのが信じられない顔で打球がとんでいった方向を見つめていた。谷口がマウンドにかけよった。

谷口「どうして外角の高めなんかにはうったんだ？」

イガラシ「どうしてって…、あつ…、つ、つぎの六番とかんちがいしちゃった。」

谷口「おちつけよイガラシ！」

青葉ベンチでは…

遠藤「この調子じゃなん点はあるかわからねえな。」

一軍捕手「まったく。」

青葉部長「あまくみるとひどいめにあうぞ。」

一軍捕手「へ…?」

審判「スリーアウトチェンジ!」

一回の表は結局打者一順して六点とられてしまった。この回の失点はイガラシが打たれたというよりも自分たちのエラーの失点がほとんどだった。

墨谷ベンチでは円陣をくんで谷口がナインに注意をあたえている。

谷口「いいかおまえたちはやつのだまを地区予選で打っているんだ、自信をもつていけよ、こんどは変化球も投げてくるはずだ、おちついてタマをみていくんだ。」

部員「は、はい!」

丸井「ツーストライクまで投球をみていきましようか?」

谷口「そんな必要はない、それよりまずおちつくことだ。」

トップバッターセカンド丸井がバッタボックスにむかう。谷口は声をかけた。

谷口「いいか、おちつけば打てるんだからな!」

丸井「は、はいっ。」

丸井がバッターボックスに立とうとしたとき、墨谷応援団が丸井に声援を送った。

「かっとなせー、かっとなせー、まーるーいーっ!」

丸井は応援に聞きいつてしまつてなかなかバッターボックスにはいろうとしない。

審判「きみ、はやくバッターボックスにつきたまえ!」

丸井「どうも、どうも…」

「かっとなせー、かっとなせー、まーるーいーっ!」

佐野の一球目、丸井は空振り、二球目も…、三球目はみのがして丸井は三振をきつしてしまう。

佐野「ぷっ、どこみて打ってんだい。」

二番打者高木も丸井とおなじであつた。自分に対しての応援の声に佐野のボールが見えなくなつていた。

審判「ストライクバッターアウト!」

しかし高木はバッターボックスに立ったままである。

一軍捕手「きみ、アウトだよ!」

その声を聞いてやつとでバッターボックスからベンチにかえつた。青葉応援席からは笑い声が…

谷口「これじゃダメだ。」

墨谷応援団は…

「おい、おれたちが応援するとよけいあがつちゃうんじゃないか…」

「そうだな、そうとしとこうか。」

応援団は口に人差し指をあて応援生徒に静かにするよう合図を送った。

谷口「イガラシ、気分をかえるために一発たのむぞ！」
イガラシ「まかしといてください！」

イガラシがバッターボックスに立った。

イガラシ「さあ、こいつ！」

佐野「こいつはまともらしいな…」

「カーン！」

イガラシは佐野の初球、カーブをフルスイングした。打球はレフト方向にのびていく。レフトがバックする。フェンスぎわでイガラシの打球を捕球した。

審判「チェンジ！」

イガラシ「まったくよくとりやがるぜ…」

「おしかったなあイガラシ。」

「やっぱりだまってよかったのかな？」

「うむ。」

8・3 反撃! 墨谷二中!

地区予選しかしらなかった墨谷ナインは全国大会決勝という大試合の重荷とその球場内の熱気あるふんいきにのまれあがりにあがっていた。しかし谷口のおちつかせようとするさいさんの注意が効をそうしたのか、回がすすむにつれおちつきをとりもどしてきた。

青葉は初回到六点、二回到二点、三回到一点をとった。墨谷は無得点のままであった。四回をおわって青葉が九点リードのまま青葉学院の攻撃がはじまる。

打球がショートにころがった…ショート高木はなんなく捕球し一塁に投げる。

審判「アウト！」

谷口「そうだ、その調子だ！」

谷口がおちつきを取りもどした高木に声をかけた。高木は笑顔でこたえる。

一軍捕手「塁にでなくなっちゃったな！」

遠藤「うむ…、しかしああいやなコースにきめられちゃあな…」

一軍捕手「まったくだぜ！」

打球がセンターにあがった…センター浅間も前進してなんなく捕球する。

審判「チェンジ！」

五回の表、青葉は無得点におわった。

どの打者に対しても全力投球するピッチャーイガラシにだいぶ疲労がたまってきた。

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

谷口「だいじょうぶかいガラシ。」

イガラシ「なあにまだまだ！」

この回は六番センター浅間からはじまる。

審判「ストライク！」

浅間「くそっ、こんなタマがみえなかったんだから…」

カーン！ 浅間は佐野のストレートを思いっきりたたいた。セカンド横をぬきセンター前どころがるかと思われた打球をセカンドが横っ飛びでボールをとり一塁に投げた。

審判「アウト！」

七番遠藤もジャストミートしたのだがセンターフライに終わる。

応援団は一回のイガラシの打席からあいかわらず静かなままであった。ベンチから丸井がでて応援団に向かって声をかける。

丸井「おまえら、なにつったんでんだよ、お通夜じゃねえんだぞ！ せえの！ かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

応援団「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

九点リードした青葉ベンチでは…

吉田「なんだ、やつら九点もとられちゃってやけおこしたのか？」

山下「そりゃ九点も差をつけられちゃあな。」

吉田「それもそうだ。」

青葉部長「やつらが試合をなげるようなやつらじゃないことをしつとるくせに、バカなつよりはよせ、げんにうちがおされてるじゃないか。」

二軍選手「……」

青葉部長「ま、心配するな、イガラシはもう限界だ、いよいよになればつぶせばいい。」

二軍補欠「ぶ、部長…」

二軍補欠選手が指さした方向は墨谷ベンチの投球練習場であった。そこでは谷口がキャッチャー小山を相手に投球練習をはじめていた。谷口が投げるたびにキャッチャー小山のミットから「ズバーン！ズバーン！」と音がしていた。

応援団A「野球部にまでみはなされたっていうのに、どういうこったい…」

丸井「このーっ！ てめえらキャプテンをなんだとおもってんだ！」

応援団B「す、すみません。」

丸井「なめやがって、まったく！」

このようすを見て青葉ナインもあわてていた。マウンドの佐野のところに集まって谷口の投球練習をみていたが…

審判「きみたち、はやく守備につきなさい！」

一軍捕手「は、はいっ。」

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

ピッチャー佐野がバッター加藤に投げようとしたが谷口の投球練習が気になって集中できない。加藤はその佐野のタマを右中間にはこんだ。

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、しーまーだーっ！」

九番島田もつづく…、あたりは左中間だったがレフト、センターおたがいボールをとろうとしてぶつかってしまう…青葉のエラーである。ツーアウトランナー二塁三塁でバッターはトッポバッター丸井に回った。

ピッチャー佐野は一塁側ブルペンで投球練習をしている谷口が気になってしかたがない。小山のミットから「ズバーン！」と音がするたびに佐野だけでなく青葉ナインが一塁側ブルペンのほうをみる。

丸井「どったの！ カモン！」

佐野「くそっ！」

「カーン！」

丸井は佐野の変化球をジャストミートした。あたりはぐんぐんのびてライトスタンドにはいつてしまった。スリーランホームランがでた。

谷口「やった！」

谷口は投球練習場から思わず声をだした。そして丸井をナイン全員でむかえた。

「いいぞ丸井！」

「こんちくしょうめ！」

9対3、墨谷二中はその差六点差にせまった。

青葉部長「タイム！」

青葉部長はタイムをとりナインをベンチ前にあつめ落ちつくように指示した。

残念ながらつぎの打者二番高木の打球はライト線の打球だったが、ライトの好守備もありアウトに終わった。

審判「チェンジ！」

青葉ナインは無言のままベンチにもどってくる：

谷口「なんだ、まだ投げるつもりか！」

イガラシ「この回だけ、あとは投げろったってどっちみち投げられっこないんですからね。」

谷口「むりをするなよ、いつでもかわるからな。」

イガラシ「はいっ。」

谷口「みんな、こっちのペースになってきたんだ。おちついていこうぜ！」

部員「オウ！」

小山「がっちりいこうぜ！！」

部員「オウ！」

キャッチャー小山がみんなに声をかけて雰囲気をもりあげる。

8・4 谷口のケガ

六回の表の青葉の攻撃がはじまった。この回イガラシは先頭打者をセカンドフライ、二番目の打者をサードゴロに打ちとってかんたんにツーアウトをとった。

三人目青葉のキャッチャーの打ったボールは三塁後方のファールフライだった。谷口がおいかける。

イガラシ「サード、もういっちょう！」

谷口「オーライッ！」

谷口は手をあげてボールを追いかけるが、ボールをキャッチした瞬間いきおいあまって青葉ベンチにつっこんでボールをおとししてしまう…

谷口「すみません。」

青葉部長「ナイスファイト！」

青葉ベンチにあやまった後、おとしたボールをひろってイガラシに投げようとしたとき谷口の右手に激痛がはしった。

谷口「うう…」

谷口はその場にすわりこんでしまう。イガラシがすばやくかけよるが…

イガラシ「キャ、キャプテン！」

谷口「ぐぐぐ…」

イガラシ「だ、だいじょうぶですか…」

外野を守っていた選手も三塁側青葉ベンチ前に集まってきた。

遠藤「どうしたんだよ。」

島田「つ、爪が…」

青葉部長「だれか救急箱をもってこい！」

谷口はファールボールをおって青葉ベンチにつつこんだときに爪をはがしてしまったのである。応援席からも

応援団「どうしたんだ、いったい」

一年生「つ、爪をはがしちゃったんです！」

応援団「……」

部員「……」

遠藤「こ、これじゃあイガラシのリリーフはむりじゃねえか…」

イガラシ「バ、バカな！ サードだってむりだ！！」

谷口「なあにサードならだいじょうぶさ。」

審判「き、きみ、むちやをいっちゃいかん、こうたいしなさい！」

谷口「だいじょうぶです、指をかばえばなんとかやれます！」

審判「ま、まあ、きみがそういうならむりにはとめんが…」

イガラシ「キャプテン、ほんとうにやるんですか？」

谷口「そのかわり、おまえにつづけて投げてもらうしかないぞ。」

イガラシ「まかせといてください！」

部員「……」

イガラシは谷口の指に包帯を巻きながら投げることを約束した。

イガラシ「いいですか、これで。」

谷口「ありがとう！」

小山「イガラシ、そんなことをいっておまえだいじょうぶなのか？」

イガラシ「最後の最後まで試合をすてないってことをキャプテンからいやっていうほどおしえられましたからね。」

イガラシ「さあ、みんな守備につこうぜ！」

青葉部長「気の毒になあ…」

遠藤「せっかくいい試合になってきたっていうのにぎんねんだなあ。」

後藤「まったく！」

青葉部長「おまえたち、たのしいことをいうじゃないか。」

青葉一軍「……」

イガラシ「みんな、ツーアウトだぞ、がっちりこうぜっ！」

部員「オ、オウ…」

イガラシ「サ、サード！」

ケガをした谷口のところに打球がいった。谷口はタマを捕球するも一塁への送球はやまなりのタマになってしまった。投げおわった谷口の指には激痛がのこっている…

審判「セーフ！」

谷口「わるい、わるい！」

谷口はケガの痛みをこらえながらナインにあやまった。

遠藤「しょせん、爪をはがしてやろうってのがむちゃなんだよ。」

イガラシ「タイム！」

イガラシがタイムをとり谷口のところにいく…

イガラシ「やっぱり、かわったほうがいいですよ！」

谷口「すまん、すまん。こんどはもうすこしましな送球をするよ。」

イガラシ「……」

イガラシは次打者に対して谷口のところに打球がいかないように外角へのカーブを投げた。打ったタマはセカンドゴロとなって丸井が捕球して一塁に送球する。

審判「アウト、チェンジ！」

イガラシ「だいじょうぶですか？」

谷口「そんなことより自分のことを心配しろ。」

イガラシはベンチにすわっても肩で息をしている。

谷口「肩をひやすなよ。」

イガラシ「ど、どうも……」

谷口の負傷でリリーフの希望をたたれ気おちしたのか、六回の墨谷の攻撃は三番イガラシからの好打順だったが三者凡退におわった。

8・5 死闘！ 墨谷対青葉

イガラシは力をふりしぼって投げつづけた。もうすでに体力の限界をすぎたイガラシであったが、さらに歯をくいしばって投げつづけた。負傷しながらも最後の最後まで試合をすてない谷口の態度がイガラシをふるいたたせて、ただ気力で投げさせていたのである。

そして八回の表青葉の攻撃は…

谷口「その調子だ、がんばれイガラシ！」

イガラシは肩で息をしている。「はあ、ふう、はあ……」

バッテリー佐野に対する二球目、セカンド横セスター前にぬけるかとおもわれたゴロだったがセカンド丸井が横つとびでとろうとする。しかしグラブに当ててはじいてしまう…しかしショートの高木がこのタマをバックアップして一塁に投げた。

審判「ア、アウト！」

加藤「ナイス、ショット！」

ショート高木のファインプレーがでた。

トップバッテリーにかえってセカンド中村はイガラシのタマをおもいきってひっぱった。サードゴロとなる。谷口は指の痛みをこらえながら一塁に向かって投げた。送球は一塁手手前でワンバウンドしたが加藤ががちりこのタマをとった。

審判「アウト！」

谷口はアウトの声を聞くとホッと息をついた。しかしイガラシのようすがおかしい：

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

谷口「タイム！」

谷口がタイムをとりマウンドまでいった。

谷口「だいじょうぶかイガラシ！」

イガラシ「そんなことよりいたむんじやないですか、顔がまっさおですよ。」

イガラシの強気なことばに谷口はサードにもどる。

中野「よくやるぜ、ボロボロになりやがってよ！」

一軍捕手「まったく。」

後藤「しかしいいかげんにおいてほしいぜ、あいてをしているおれたちがかなわねえぜ。」

中野「やりずれえよな、まったく。」

ツーアウトをとって次の打者はセンター中村である。中村はイガラシのタマをおもいつきりひっぱる。レフトファールグラウンドにハーフライナーとなったタマをレフト遠藤がもうすこしで取れそうだったが、フェンスにぶつかりボールをおとしてしまう。

審判「ファール！」

遠藤「く、くそっ！」

浅間「だ、だいじょうぶか…」

遠藤「バ、バカヤロウ！ これしきのことです！」

遠藤はおとしたメガネをかけながらようすを見にきたセンター浅間に答えた。
青葉ベンチからはこのファイトにただおどろくばかりであった。

丸井「がんばれ！ イガラシ！ ツーアウトだぞっ！」

イガラシ「はあ、ひい、はあ…」

イガラシはつかれながらも全力投球をする。バッター中村は再びひっぱってレフトに大きなあたりを打つ：

レフト遠藤はバックする。今度はフェンスに頭をぶつけながらも打球をとる。

審判「アウト！」

しかしレフト遠藤がたちあがらない：

浅間「え、遠藤…」

審判「だいじょうぶか、きみ…」

遠藤「ボ、ボール…」

浅間「安心しろ、おとしちゃいないよ。」

遠藤「ホッ。」

レフト遠藤は浅間の肩につかまりながらベンチにもどった。

イガラシもマウンドからベンチにもどるが途中でたおれそうになる…

谷口「だいじょうぶかイガラシ！」

イガラシ「だいじょうぶですって。」

谷口「だれか、タオルをぬらしてこい！」

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

イガラシはベンチでよこになった。

このようすを見ていた青葉ナインはベンチからあぜんとしていた。

青葉部長「はやく守備につかんか！」

青葉部員「は、はい。」

この回のトップバッター島田はイガラシのがんばりにこたえるかのように佐野のタマを打った。次の打者丸井も…高木も…そしてつかれているイガラシも…ケガをしている谷口も…

谷口が負傷していちどは絶望したナインだが、最後の最後まであきらめまいとする谷口の態度がイガラシをふるいたたせ、そしてナインをたちあがらせた。またしても不死身のようにはいあがってきた墨谷ナインのおそろしさに青葉ナインはようやく気がついた。

8・6 ピッチャー谷口

回は八回、この回墨谷は二点をくわえ9対5、四点差にせまってまだノーアウト満塁、青葉ナインはマウンドに集まっている。

審判「きみたち、はやく守備につきなさい！」

三塁には高木、二塁にはイガラシ、一塁には谷口、そしてバッターは五番小山である。

小山の打ったタマはレフトフライとなった。三塁ランナーはタッチアップしホームインする。ワンアウト一塁、二塁となった。

部員「たのむぞ浅間！」

浅間「まかしとけ！」

つづく六番浅間は三遊間をぬくレフト前ヒットとなるが…

三塁に向かっていった二塁ランナーイガラシが三遊間でたおれてしまう。おきあがれないイガラシ…。二塁に向かっていった谷口はイガラシにかけよる…

谷口「イ、イガラシ！」

谷口「イ、イガラシ、ど、どうしたんだ！」

イガラシ「はあ、ひい、はあ、ひい、ちよ、ちよっとあしがもつれちゃって…」

イガラシは息をきらせながら答えたが…、そのときレフトから打球をうけたセカンド中村が二人にタッチする。

審判「スリーアウト、チェンジ！」

イガラシ「す、すいません…」

中村「なんだかわるいことしたみたいだな…」

佐野「まったく。」

青葉部長「バカが！ そんなきどつてるばあい！」

部員「……」

墨谷二中は最終回の守りにはいった。マウンドで丸井がイガラシに声をかける。

丸井「がんばれ、イガラシ、最終回だぞ！」

イガラシ「ひい、はあ、ひい…」

イガラシは最後の力をふりしぼって三番サード後藤に向かってなげた。
「ズバン！」

審判「ストライク！」

キャッチャーミットから大きな音がした。イガラシが投げたタマは初回のときとおなじくらいの威力あるタマだった。バッターの後藤はもちろん青葉ベンチもあぜんとする…それにひきかえ墨谷応援席は声をからして応援する。

「ナイスピーっ！」

「いいぞイガラシーっ！」

イガラシの二球目を後藤はセンターにはこぶがセンター浅間がこのタマをバックハンドでキャッチする。

応援席からは激励の声がかかる。

「ナイスセンター！」

「いいぞーっ、イガラシーっ！」

マウンドに墨谷内野陣が集まってイガラシをはげます。

谷口「がんばれイガラシ！ あとふたりだぞ！」
イガラシ「ひい、はあ、ひい…」

青葉部長「タイム！」

青葉部長はバッターボックスに入ろうとしていた四番打者をベンチ前によんだ。

青葉部長「ファールでつぶせ。」

一軍捕手「は、はあ…？ やつはだいぶバテてますよ。それに三点リードしてますし…、それに…」

青葉部長「……」

一軍捕手「わ、わかりました。」

イガラシの一球目、あきらかなストライクのタマをバッターはファールにする。

二球目もファール…、三球目もファール…、四球目、五球目…

応援団からヤジがとぶ

「きたねえぞーっ！」

「正せい堂どうと打ちやがれーっ！」

青葉部長「これでいいんだ！」

イガラシは投げたあとたおれこんでしまう。投げたタマはボールとなる。

谷口「だいじょうぶか、イガラシ！」

丸井「くそっ、きつたねえまねしやがって！」

イガラシ「よしなさいよ！ おれが三振とれないのはあいてがうまいからなんで、それをおこったってしょうがないでしょ！」

丸井「そ、そりゃ、そうだけど…」

イガラシ「心配しなさんなって、なんとしても三振にきつてとりますよ！」

谷口「そうだ、その意気だ！ ワンアウトだ、みんながっちりこうぜ！」

イガラシは息をきらせながらきわどいコースに投げるが…

審判「ボ、ボールツー！」

イガラシ「こいつはどうだっ！」

力いっぱい投げたボールをバッターはファールにする。そしてボール、カウントはツーストライクスリーボールとなった。

フルカウントからイガラシは投げるがマウンドの土に足をとられてたおれこんでしまう。投げたタマは小山がとびつき捕球するが、これでフォアボールとなってしまった。

審判「テ、テークワンベース！」

小山「イ、イガラシっ！」

イガラシが倒れたマウンドに墨谷ナインが集まった。

谷口「ピッチャーとサード交代します！」

ナイン全員谷口の顔を見る…

谷口「イガラシ、サードにはいれ。」

イガラシ「そ、そんなむちゃな！」

谷口「おまえよりましだ、さあみんなも守備につけ！」

谷口「練習ダマはけっこうですから、プレイをかけてください。」

審判「プ、プレイボール！」

ピッチャー谷口に対しても五番中野は初球のストライクを見送った後はファールボールで逃げた。谷口は四球目とんでもないボールを投げてしまう。キャッチャー小山はとびついてこのボールをおさえる。

谷口「すまん、すまん！」

たった四球投げただけなのにケガの痛みをこらえて投げる谷口はもう汗びっしょりになっていた。ツーストライクツーボールから中野はなおもファールボールで逃げる。キャッチャー小山は谷口に返球しようとしたとき谷口の投げたタマに血がついていることに気がついた。キャッチャー小山はユニフォームのズボンでタマをこすってから谷口に返球した。

そのときである…青葉応援席から…

「いいかげんにしろ！」

中野「タイム！」

青葉応援席からの声の中野はタイムをとり応援席を見つめる。

再度バッターボックスに立ち谷口のタマをファールにする。

また青葉応援席から中野にむかってヤジがとんできた。

「やめろやめろ！」

「そうだそうだ！」

「それが名門青葉の野球かよーっ！」

「そんなことまでして勝ちてえのかよっ！」

「やめちまえ！」

「ピーピー、ピー」

中野はバッターボックスをはずしてこのヤジをきいていた。

審判「きみ、はやくバッターボックスにはいりなさい！」
中野「は、はいっ。」

青葉部長「な、なんてやつらだ！」

青葉部長がベンチからでて応援席をにらみつけていると：

「カーン！」

バッターの中野が谷口のタマを打った。打ったタマはセカンドライナーとなり丸井がダブルプレイにしとめる。

審判「アウト！ チェンジ！」

「やった、やったーっ！」

「谷口、イガラシいいぞーっ！」

応援団は大きな声でベンチに戻る墨谷ナインをでむかえる。

谷口「イガラシ、よくがんばってくれたな！」

イガラシ「そんなことより、キャプテンの爪だいじょうぶなんですか？」

谷口「うお……」

イガラシが谷口の指のようすをみようとかるくふれた：

谷口は指を押さえたままベンチにすわりこんでしまう…

谷口「うう…」

丸井「バ、バカ、爪をはがしてんだぞ…！」

イガラシ「……」

イガラシはあぜんとした顔で苦しがつている谷口を見ている。

丸井「ど、どうしたんだよ…？」

イガラシ「ゆ、指が…、おれている…」

部員「……」

谷口は指が折れているにもかかわらず、今までナインにかくしとおしてきたのだった…

丸井「きゅ、救急箱！ そ、そえ木になるものをさがせ！」

イガラシが谷口の指を包帯でまく…

イガラシ「な、なにも、こんなにまでして…」

8・7 栄光の日本一

骨を折ってまで投げぬいた谷口の指をイガラシが包帯をまいている。谷口を取り囲むようにナインが集まっている。

谷口「いいみんな、勝つも負けるもこの最後の攻撃にかかっているんだぞ、わかっているな！」

浅間「いわれなくてもわかってます。」

この回トップバッター浅間は大きなあたりを打つもセンターフライとなる。センター藤田はフェンスにぶつかりながらもこの打球を捕球する。



審判「アウト!」

藤田「ひゃあ、あぶねえ、あぶねえ。」

浅間「く、くそっ!」

墨谷応援席がしずまりかえる。

谷口「たのむぞ、加藤!」

加藤「まかしといってください!」

佐野「あとふたりね。」

佐野のタマを加藤は一、二塁間をぬく打球を打つ。ライトが全力で前進してきて一塁に送球する。判定は…

審判「セーフ!」

「やったー! やったーっ!」

「たのむぞ島田ーっ!」

応援の声を背中にうけ島田はバッターボックスに立った。そして佐野のタマをレフト前に打つ。レフトが二塁に送球するもセーフとなる。ワンアウト一塁二塁でトップバッター丸井に打順が回った。

部員「たのむぞ丸井!」

丸井「キャプテンようくみててください、イガラシもよく目をあけとけ!」

佐野「くそっ!」

丸井「このーっ!」

「カーン!」

しかし丸井は力みすぎて、打球はセカンドフライとなってしまふ。これでツーアウトとなつてしまった。墨谷側応援席は静まりかえる。

谷口「高木、りきむなよ!」

高木「は、はいっ。」

ツーアウトとなつてしまったことで高木は試合がはじまったときと同じくらい緊張していた。それにひきかえマウンド上の佐野はロージンを手につけながら気合いを入れ直していた。

佐野「あとひとりね!」

佐野が投げた。高木が打つ。しかし打球はサードゴロとなつてしまふ。

佐野「サード!」

後藤「し、しめた。」

青葉ベンチは勝ったとおもひ、墨谷ベンチはだめだとおもつた…

しかしサード後藤は勝ちを意識したとたん、ボールをとるよりさきに一塁に目がいきタマから目がはなれてしまった。後藤はボールをはじいてしまふ…

後藤「し、しまった!」

佐野「あ!」

青葉にエラーがでた！ サード後藤は自分ではじいたボールをとったがどこにも投げられない。ツアアウト満塁でイガラシに打席が回った。イガラシは荒い息のまま一度も素振りをしないまま打席にはいった。

だがイガラシは佐野の変化球をフルスイングした。打球はおしくもレフトフェンスに直接あたるファールとなる。

青葉部長「タイム！」

青葉部長はバッテリーに注意をあたえている…

佐野「え…、し、しかし…」

青葉部長「いわれたとおりすればいいんだ！」

佐野「は、はいっ。」

審判「プレイボール！」

審判のプレイボールがかかるとキャッチャーが立ちあがった。ピッチャー佐野は高いボールを投げる。敬遠である。

墨谷二中応援席からは青葉にヤジがとぶ…

「きったねえぞ！」

「勝負しろーっ！」

審判「フォアボール！」

満塁なので墨谷二中が一点追加し9対7、二点差となる。

四番谷口に対してもキャッチャーは立ちあがった。三番イガラシ、四番谷口との勝負をさけ五番の小山と勝負する青葉の作戦だった。

審判「ボール！」

青葉応援席からも味方の佐野をやじる声がかこえる。

「にげるが勝ちか！」

佐野はマウンド上でやや力なくなっていた。そのときである…三塁ランナー島田がホームに向かって走ってくる…

一軍捕手「さ、佐野っ！」

佐野はいそいでキャッチャーに向かってボールを投げるが…

審判「セーフ！ セーフ！」

ランナーがそれぞれ進塁しツアアウト二塁三塁、たまらず青葉部長がタイムをとった。青葉ナインがベンチ前に集まってくる。

青葉部長「どうしたというんだ、佐野。」

佐野「す、すみません…」

青葉部長「はっきりいってしろ！」

佐野「勝負できないのがくやしくて…」

青葉部長「なるほど。たしかにここで勝負すればおまえは満足するだろう。中野がファールしろといったのにもかかわらずヒティングにでてしまったのもおなじ気持ちからだろう。いまさら中野の失敗の結果をせめるつもりはない。しかし、わしはその場のヤジに動揺しうさははらし満足しようとした中野の気持ちはゆるせん！ おまえたちの目的はなんだ。勝つこと以外になるがあるんだというんだ！ いいか、佐野、目さぎだけの小さな満足感のために試合の大局をわすれるんじゃない！ ほんとうの満足感というものは試合に勝った者が味わえるものなんだ。」

部員「……」

青葉部長「さあ、はやく守備につけ！」

部員「は、はいっ。」

返事はしたものの、青葉ナインのあしどりは重かった。ベンチをあとにしてポジションに戻ろうとするが…そんな部員の姿をみて部長は…

青葉部長「ま、まで…」

青葉部長がナインを呼びもどした。

青葉部長「佐野、そんなに勝負してみたいか？」

佐野「い、いえ、そんな…」

青葉部長「ほかの者もそうなんだな！」

一軍捕手「い…いや…その…」

青葉部長「勝負してこい！」

青葉部員「……」

青葉部長「おまえたちのあらんかぎりの力で勝利をとってこい！」

佐野「あ、ありがとうございます！」

青葉ナインは部長の「勝負してこい！」のひとことで生き返ったように走ってポジションに戻った。

審判「プレイボール！」

審判からプレイボールがかかったがキャッチャーはすわったままである。谷口との勝負である。

「お、おい、キャッチャーがすわったままだぜ！」

「う、うむ！」

「いよいよ勝負にでるらしいな…」

「それでいいんだ！」

「佐野！ 三振にきっておとせーっ！」

「やっちまえ谷口！」

「スタンドにたたきこめーっ！」

墨谷応援団、青葉応援団それぞれが大きな声で声援をおくった。

佐野が谷口に向かってタマを投げた。

「ズバーン！」

キャッチャーミットから大きな音がした。青葉応援団が佐野に声援をおくった。

「いいぞ佐野！ その調子だ！」

「やっちまえ！」

二球目谷口はバットを振るが、佐野のタマを振り遅れてバットは空を切る。

墨谷応援団は静まりかえり、ぎやくに青葉応援団はいちだんと大きな声になってきた。

ツーストライクワンボール、佐野は最後の勝負球を投げた。

谷口のバットはわずかにタマにかすったがボールはキャッチャーミットに…

審判「ストライクバッターアウト!」

そのときキャッチャーのミットからボールがこぼれる…

審判「い、いや、ファール、ファール、ファール…」

佐野「さすがだぜ…」

谷口「タ、タイム…」

谷口のケガをしている右手がしびれている。谷口はバッターボックスを一度はずした。谷口はあれだけのタマを投げられたらとても打ちかえせない、あてるだけで精いっぱいだと感じた。なんとかして打たなくては…いやなんとしても打ってみせる…谷口はバッターボックスにはいった。

カウントは変わらずツーストライクワンボール。佐野は力いっぱい勝負球を投げた。

佐野「これが、とどめだーっ!」

「バキッ」

谷口のバットが折れた。谷口は打った打球のゆくえもみないまま一塁に向かって走った…。ボールはふらふらとあがってショート後方にあがった。しかしショートはこれをとれない。この間にサードランナー加藤がホームイン。同点である。二塁ランナーイガラシはサードコーチャーのストップの声を無視してサードをまわってホームにむかう…

イガラシ「ここでおれがホームをつかなくちゃ勝てない! もうキャプテンもおれも

投げられやしないんだっ!

イガラシは全速力で走るが足がもつれてしまいホーム手前で倒れてしまう…レフトから返球を受けたキャッチャーはタッチをしようとするが…イガラシは倒れる力を利用してからだを一回転させてホームをねらった…

キャッチャーはその変則的な動きにタッチができなかった。そして気がついたときにはイガラシの足がホームベース上にのっている。

審判「セーフ! ゲームセット!」

「ワーツ!」

その瞬間、墨谷応援席からはグラウンドがわれるばかりの歓声があがった。テープがグラウンドに投げこまれる。中には喜びのあまりグラウンドにとびおりてしまう生徒もいた。

「勝った! 勝った!」

墨谷ナインはホームベース上のイガラシをとりかこんだ。

青葉ナインはうなだれてベンチ前に集まる。

佐野「す、すみません…」

青葉部長「わしがいままでしつとるなかでいちばんいいタマだったよ。あれを打たれたんじゃしかたない。さあみんな勝者に拍手をしてやらんか。」

青葉ベンチから拍手の音が…

青葉応援席からも…

墨谷応援団から、青葉応援団から、そして青葉ナインから球場内にいるすべての人から墨谷二中ナインにむかって祝福の拍手が…

こうして墨谷二中は10対9で青葉学院をやぶりついに日本一の栄冠をつかんだのである。

かくして谷口にとって最後の試合は終わったのである。

